

いつか（誤字脱字その他チェック中）

ヤチ

黒いバイクがいま出雲をでる。

灰色の不吉な雲がこの国を覆っている、空を侵食し続ける灰色の雲。

東へ進路を向け邪気に澱んだ大気を切り裂くように、

黒いバイクは駆け抜けていく。

携帯が鳴る、メールだ。

「タケ！マック！すぐ！」簡潔な彼女の指令が届いている。
ベッドから起き上がりメットをつかみ部屋を出る、階段を駆け降り玄関へ、扉を開きながら「アンタマが呼んでるから行ってくる！」
ぼくはそれだけ叫んでガレージ走る。

キーを差込みロックを解除して、サイドを蹴り上げ表へ押し出す。
シートをまたぎ、キーを回してラインを繋ぐ、キックレバーのステップを右足で回転させ蹴りこむ。
十分整備されたYAMAHAは躊躇することなく吼える。
YAMAHAを静かに発進させて学校の近くにあるハンバーガーショップへ向かう。

「タケ！タケ！遅いよ！、でも来たから許す！」店に入ると同時に彼女の元気な声がぼくに浴びせられる、声の主が陣取るテーブルへ歩き、彼女の正面に座る。

「アンタマ今度は何、かな？」と苦笑しながら聞くと、「用事がないと呼んじゃだめか？タケ！」と上目使いで返される。

安納珠代、ぼくを含め、彼女の友人達はアンタマと呼んでいる。
ぼくをタケと呼び捨てるのは彼女一人だが。

「別にいいけど」ぼくが答えると、神妙な面持ち・・・を意識しながら彼女は立ち上がり、厳か・・・を表現するつもりの低音で「では、静粛に聞くのじゃ！タケ！重大発表があるのだ！」

「重大発表かぁ、ピクルスが一つ多く入ってたとか？それに」
テーブルのかじられたハンバーガーに視線をやりながらぼくが言う。

「タケ！君はいつも志が低いのおー！彼女として、時々なさけなくなるよ、とほほほ」アンタマの両手を頬にそえる、「とほほ」ポーズはなんだか可愛い、ぼくのお気に入りだ。

「アンタマ、君はぼくの彼女だったのか？・・・んんん、はじめて知った」
「いつも言ってんじゃん！オレはタケの彼女だって、なんと言えれば理解するのじゃ、君は、幼稚園から、この今の一瞬においても、ずっとタケはオレの彼氏なのだ！」わざとらしく頬を膨らませながらぼくに説くアンタマもお気に入り。

彼女というより、ぼくと彼女は幼なじみというべきか。
幼稚園の頃からずっと一緒にいるから、それが適切かもしれない。

「たしかに長い付き合いではあるかな、ところで重大発表とはなんだい？アンタマ」

「あっ、それぞれ、タケ！オレはやったぞ！」

「何を？」

「夢がかなったのじゃあ！タケ！」

天井を見上げるように視線を上に向け、手のひらで祈りの印を組む乙女がこれもいいかな。

「音大？」、もしかしたらそうでは？と思いながらぼくは聞く。

「よく聞けタケ！、天才的ピアニストでしかも美少女のオレは！」

「天才だったのか・・・美少女？んんん、あえて否定はするまい」

幼稚園の頃にはすでにアンタマはピアノを演奏していたし、小、中、高、受賞の常連でもあった。

美少女・・・個人の好みもあるし、これは微妙かな。

「あたりまえじゃっ！タケ！招かれたのじゃ！、大倭音楽大学にピアノ特待生じゃぞお、タケ！」

「わおっ！本当か？それ、アンタマやったな！そうかアンタマは天才だったのか！」

「おおお！タケも喜んでくれるかっ！わっははは！乾杯じゃ！乾杯しようタケ！」

日本で1、2を争う音大に特待生で進学することになったんだ、おめでとうアンタマ。

置かれていた水とコーラの紙コップで乾杯するぼくとアンタマ・・・

どうせなら水ではなくて、ぼくもコーラがよかったなアンタマ。

「そうか、大学は東京で決まり・・・かあ」

「寂しいだろう？タケ、心配するな！連れて行ってやる！一緒にいこう東京へ！」

「志望を東京の大学へ替えるんだタケ、タケならどの大学でもいけるだろう？」

「タケはいつもオレのそばにいないてはいけないのだ！彼氏だから！」

「いや、それはそれで・・・大変そうだ」

「わっははは！照れるなタケ！オレの最愛の人」

冬、そして春、時は静かに流れ希望と夢が開花する。

アンタマはピアノの才能をさらに大きく開花させるために東京へ、

「タケのために女も磨いてくるぞっ！」そう言って彼女は出雲を出て行った。

ぼくは地元の大学の工学部へ進学した。

歳とった両親をおいて、金のかかる東京の大学へはいけない、そう思った。

将来地元の機械メーカーに就職するつもりで工学部を選んだ。

「神社の跡継ぎ息子がなんで工学部？」とよく同級生に聞かれるが、

ぼくには十歳以上歳の離れた兄と姉がいる、姉は嫁ぎ、兄はずいぶん前

から修行にいったから、高校の同級生がぼくを跡継ぎと思うのも当然か

もしれない。

そのうち兄が戻ってくるだろうから、ぼくは気楽に趣味と実益両立を目指

してメカトロニクスを極める。

「タケル始まるよ、そろそろ上がっておいで」

ガレージでYAMAHAを整備していると母の呼ぶ声。

「はい！母さん」と返事を返す。忘れてた、アンタマがTVに写る日だった。

「NHKから出演依頼があった、TVに写るからちゃんと観るのじゃ、タケ！」
アンタマからそう電話があったのが先週だったかな。

1時間程度の番組らしいからとりあえず整備を一時中断。

ツナギを脱いでYAMAHAの上へ放り投げる。

奥にある洗い場で軍手はずし蛇口をひねって手のひらの油を洗い流す。

居間へ行くと両親はすでにてTVの前にスタンバイしている。

「あっ、！しまった始まってたか！」画面を見て思わず叫んでしまった。

「大丈夫、珠代ちゃんが出てるけどまだ番組じゃないのよ」

すでに画面にはピアノに向かうアンタマが写っていたが、どうやら予告映像らしい、このあとCMでそれから本番というところか、とりあえずほっとした。

いくつかのCMを終えると番組が始まった。司会者とアシスタントがVTR映像を交えゲストを紹介していく、2番手がアンタマだった。どこかよそいきの顔のアンタマ、「緊張してるねアンタマ」ぼくが言うと、「そうね、ゲスト出演は珠枝ちゃん初めてだし、それに偉い音楽家の先生も出演されてるらしいわよ」母は出演者のチェックもしてたらしい。父は静かに画面を見守る・・・愛娘を見守る父親のまなざし・・・微妙かな。

その後もどきどきTVでアンタマが見れるようになった。

TVに写るたびに「どうだったタケ、キュートなオレに惚れ直したか！」と電話をしてくるのは少々いただけない気もする、そうでなくとも毎日の写メ、手料理だったり、アップの笑顔だったり・・・まあいっけど。

そういえばこの間のTV、あれは傑作だったかな。

世界大会のようなコンテストに入賞したアンタマが首相から表彰されるシーン。

歩き寄る首相に駆け寄る側近が耳打ちすると、無表情な首相が急に歓喜あふれる笑顔になって感極まった祝辞、賞状を手渡した後のハグ、予定外だったのかハグされてしかめっ面のアンタマ、しかも寄ったカメラヘアッカンベー。

日本中が笑ったかな、ぼくにまで友人たちからメールでやんややんやの祝辞、画面に映っていた首相のピカリ輝く金のバッチもくすんでしまったかもしれない。

単身赴任の父親が東京にいたから、入学と同時にアンタマの家は東京へ引越した。

お盆にアンタマの両親には会った、でも大学の受講、そして音楽活動で忙しいアンタマは出雲に帰ることはなかった。

「お正月に帰るよ、バイクで初詣、約束だよタケ。」とメールが来た時はなんだかうれしかった。

裏の神社だけではアンタマはむくれるだろうから、サークルのバイク仲間達と出雲周辺の神社めぐりをした、寒い季節のタンデムだから十数キロ圏内想定でいくつかの候補地をチェックし出雲へ帰ってマックでカフェ。

「土岐君の旧車なのにぼくらのレプリカよりパワーも足回りも上じゃない？」仲間の一人がLサイズをかき回しながらぼくのYAMAHAの評価をしはじめる。

「カフェレーサーで仕上げてるからそれなりの走りはしなくちゃでしょう、先輩」ほどよいぼくの返答。

「土岐君がいろいろいじってるのは外観だけでもわかるのだけど、なんかそれ以上」

「ぼくのテクニクということですかね、先輩」くすっと笑いながらぼくがほざくと仲間達も笑う。

「YAMAHA、楽器もやってるよね、ギター、それにピアノ？エンブレムも音叉・・・なんで3本の音叉なんだろう」仲間の一人が首をかしげる。

「共鳴する破邪の魔方陣とか」軽快にジョークなぼくは爆笑を誘う。
平穏でこの静かな時、アンタマきっと初詣はすてきな思い出にできるよ。

「だめよ、こっちへ来なさい！」母親らしき影が小さい影に言っている。
「なんでえ？なんでタケルちゃんと遊んでだめなの？」
母親らしき影がぼくに近づく、そして「うちの子と遊ばないで、ごめんね」、
その瞬間ぼくのまわりから景色が消える、同時にまぶたが開き暗闇を
見つめるぼく。

ときどき幼稚園の頃が夢に蘇る。
他の子の母親達はぼくを避けようとする、おそらく母親達に理由はない、
幼い我が子を守ろうとする本能がそうさせていたのだろう。
遊んでいるとその子たちの母親が来てぼくから引き離す。
アンタマだけが、いつもぼくのそばにいてくれた。

暗い部屋の中、携帯の青い点滅に気づいた。
「すごいすごい！タケ！有名人達がたっくさんいる！今、偉い人のパーティ
に来ているよ！！」
毎日届くアンタマからのメール、いつも簡潔、らしくてお気に入りな文章、
明日は電話でたくさん話を聞かされそうだ。

彼女が東京へ行ってから半年、日々くりかえされるたわいもないメールの
やりとり、とりあえず、おめでとう、と返信メールを送信して、再び眠りにつく。
パーティー、受賞の祝賀パーティーみたいなものなのかな、音楽、それとも
芸能界かな、騒がしいけどゆるやかに時を刻む平和な毎日というところかな、
アンタマ。

騒々しいドアノックと母の声に起こされる。

カーテンの隙間から弱々しい日差しが差し込んでいる。

「大変！大変ですよ！起きなさい、起きて降りてきなさい！」母が叫んでいる。

「今起きた！、すぐ行く！」一応返事をするけど、なんだかまだ眠い。階段を駆け下りる母の足音。

寝ぼけた身体を揺らしながらぼくは起き上がり、下へ向かう。声が聞こえる、父と母は居間にいるようだ、眠い身体を引きずり居間へ入る。

「珠代ちゃん大丈夫かしら？連絡はないの？」居間に入るとすぐに母。「夜メールが来たよ、すごいパーティーに招待されたんだって、大変でなに？母さん」眼をこすりながらTVへ近づく。

背筋に微震が走る、TVの画面が異常事態を伝えていた、画像がその状況を写し、テロップが事象を伝える。衛星画像の写真が東京都心に突然あらわれた台風のような雲の渦、それが短時間に拡大していく様子を見せている。

テロップには原因不明、状況不明、異常事態といった文字が繰り返し流れている、アナウンサーが東京都とその周辺との連絡が不通となっていると叫んでいる。

「アンタマに電話してみるから」そう言ってぼくは部屋へ向かう。転がってる携帯をつかみ折り返しダイヤルで発信をする。

「・・・・・・・・」沈黙している携帯、アンタマが危険だ。

プラグの交換が終わった、工具を箱にしまい、蓋を閉じて棚に戻す。
交換したプラグを箱に押し込み部品棚に入れる。
TVは制止画面を上げて沈黙しているらしい。
片隅のポータブルラジオは、鉄道、飛行機は運行不能と繰り返しかえし言っている、待ってろ、アンタマ、ぼくは君の所へ行く。

YAMAHAの整備をしているあいだ、絶望を叫んでいたラジオが今沈黙した、ノイズが周囲の空気を微振動させている、地表を這う電磁波通信網が崩壊したようだ。

胸ポケットの携帯が震えた気がした。
取り出したそれは、奇妙に淡く光を放っている・・・呼んでいる。
YAMAHAが携帯に呼応するようにタンク両サイドに打ち込まれた音叉の紋章を共鳴させる。
軍手はずしタンクの上に置く、携帯を開き耳にあてると同時に彼女の声、泣いている、途切れる声が「タケ助けて、助けて・・・タケル」ぼくを呼ぶ。
「タケル、武うっー！！！」永い絶叫が頭の中で反響する。

アンタマが唱えたぼくの名、武。
その瞬間心臓が大きく鼓動する・・・
記憶が頭の中を回転し爆発する、膨張する血管、たぎる血液が身体を熱く燃しぼくは紫炎に包まれる。
静かに変化する肉体を感じる、活性化された細胞と質量を増す筋肉。
記憶の破片が再構築され、隠されていた、さだめが浮上する。

東京の異変は、封印が解かれ、導きの混沌が再び発動したことを示す序詞、眼から涙が流れ落ちるのがわかる、時がきた。

幼子の母親達が遠ざけていたのはわたしではなく、珠代。
珠代の体の中に眠る光、混沌の力を母親達の本能が感じ取りそうさせた。
わたしはそれが発動したときに、鎮め、封印するために転生を繰り返す闇が送り出した防人。

粉石鹼で手に滲むオイルを丁寧に洗い流す、ガレージを出て部屋に向かう、着替えを取って浴室へ行きシャワーを浴び、再び部屋にもどり黒い皮ツナギを着込む、ヘルメットとグローブを持ち、部屋を閉じガレージへ向かう、入り口横のキャビネットから特注のエンジニアブーツを取り出し足にはめ込みブーツのチャックを引き上げる。
YAMAHAをガレージの外へ押し出し、ガレージへ戻り奥へ進む。
このガレージには不釣り合いな重々しい大きな収納子、その鍵を解き収納子の扉を持ち上げる、設けられた棚の上に棺のような黒い木箱、開けるとコート、そして金属の胸当て、そしてコートの下に刀。

「時がきたのか？タケル」、振り返ると父と母が立っていた。
「はい、父さん」父にわたしは答える、父に寄り添うように立つ母の潤む目。
「この一瞬まであなたがたの息子として育てていただき感謝いたします」
そうわたしは捨て子、神社の賽銭箱の上に置かれていた、そばには棺のような黒い箱が置かれていた。
わたしは知っていた、父と母もこの時がやがて訪れることを知っていた。

「この剣を持っていきなさい」父は神話時代を連想させる古式の剣を差し出す、「草薙の剣、この剣はきっとお前を助ける」
頭を下げ礼をし、その剣を受け取る。

胸当てを装着し、刀と剣を背中に背負いコートを羽織る、そして手をグローブに押し込む。
見守る父と母にもう一度礼を送り、待っているYAMAHAへ近づきシートを

またぐ、音叉の魔法陣が浮き上がるように光る。

キーをまわし、キック、同時に飛び出すYAMAHA。

邪気を予感させる重い大気を切り裂くように駆け抜けはじめる。

空が慌ただしく色を失って行く、異様、違和感、感じたことがない不吉が蠢いている、。

変に立ちすくむ町を後にR9を東へ、そして米子自動車道、高速自動車道路進入口は、通行止め看板やカラーコーンとバーの簡易的なバリケードで封鎖され、任務に多数の警官たちとその車両が配置されていた。

管理システムの異常が発生して交通規制をしているのだろうか。東京までの距離を考えると躊躇など意味がない、止まる意思がないことを深く沈めた前傾姿勢と加速で見せつけながら、フロントを浮かせウィリー走行で強行突破、甲高い雄叫びで追尾してくる白バイがいたが、数分で消えた。

ボアアップしレーシングパーツで心臓部を強化したYAMAHAを捕えるのは不可能。

交通規制でサーキットのと化した二車線道路、200km/hを維持し、米子自動車道を一気に走破、数時間で中国自動車道へ、そして名神高速、無人化したスタンドで給油をしながら東名高速。

「ネコふんじゃった、ネコふんじゃった、ふんじゃったらネコおどろいて逃げちゃった」歌わされるべく、「なにか違うなあタケ、んんんもう一度もう一度！」雑草がにぎやかな公園、小さな玩具のピアノ、幼稚園の先生のように振舞うアンタマのお歌のレッスンごっこ。

東名高速に入ると放置された車が目につきはじめた。さらに箱根を越えたあたりからは花火大会の道路渋滞のように車両が車列を組んで置き去りにされていた。

異変は情報ネットワークに止まらず車の電子回路への障害も発生させているようだ。

電子回路で構成された車両の神経系は日常のみ保障される軟弱なスペックのハイテク、想定外の環境変化にあっさりと敗退したのだろう。

メカ接点のリレーセンサーで構成された古いYAMAHAの神経系は支障になるダメージは今のところない。

背後まわった富士山の国を守る磁場結界は異質の波動と共振をはじめ飽和状態に近いことを微震で伝えていた。

空は液化した流動体のようにとぐろを巻く灰色の雲に蔽われ、その下には色あせた都会の景色が広がり始める。

百葉箱のそば、芝生に体を投げ出して空を見ていた。
見慣れぬ灰色の空が何かを語ろうとしている。
意識がその波長を捕らえメッセージを探し始める・・・

「タケっ！」遮るようにアンタマの声が飛んできた。

「彼女のオレががんばっているのに、クラスの応援団長が不甲斐ない」
わざとらしいがっくり肩おとしのアンタマはいまいちかもしれない。

「アンタマはチアリーダじゃなくブラバンじゃない、おさぼり団長の面倒を
見てる場合じゃないだろ」彼女の叱咤を受け流しながら仰ぎ見る。

上着は学ラン統一のブラバン、アンタマはぼくのをちゃっかり装着で頭上
で腕組み。

「それにしてもタケはガリガリだなあ、見ろオレが着ると学ランの第二
ボタンが飛んでいきそうだ」、あっ、それを見せに来たのか・・・

「感動しているな！オレの美貌に、タケは胸筋を鍛えるのじゃ」
そう言いながら隣に座る、風が頬をなでる。

混乱する高速を降りてR1で都心へ、横浜にさしかかったとき行く手を阻む異質の結界が見えた。

結界は北極のオーラのように揺らり蠢く、しかしそれはスペクトルに呼応して輝く虹色ではなく、虚ろな灰色、そして点在する黒いフレアのオーラ、それが東京という都市を隔離し、さらに拡大している。

異質の結界の内側へ入れる箇所を探し、それに沿うように東京湾へ向かう。警察、消防だけでなくすでに自衛隊も出動していた。

救助活動のために集結しようとしたのだろうが、電子機材、車両が稼働できない現状では、機能マヒで混乱する烏合の集団となっていた。

ひん曲がったファミリーカーに中学生くらいの少年達が群がっていた。カーナビなどの、お宝でも発見して剥ぎ取ろうとしているのだろうか。通り過ぎようとしたとき少年の一人が何か喚きながらこっちへ向かって走り始めた、大きく、大きく手を振りながら。

傾けながら後輪をロックしYAMAHAの方向を90度ふる、レバーを解放しフルアクセルで後輪をドリフトさせながらさらに90度、向きを変えて少年達の所へ向かう。

車には老夫婦が取り残されていた、少年たちはそれを助け出そうとしていたのか。・・・老人のともし火はすでに消えている。

一回転したのかルーフが変形しその圧迫でドアを開けることはできないようだ、ガラスは散壊しているが窓は人を通せるか微妙。フロントパネルとシートに挟まれている状態の老夫婦をエアバックを萎ませフロントから老婦人を助け出そうと奮闘する少年達。

きゃしゃな少年の肩に手をおき「左後部の窓、ここから入れるかな？」と問うと、何も言わずにその少年は行動を始めた。

残ったガラスの破片を取り除き頭から入ろうとする少年に「これを」と、はずしたグローブを素手の手に渡す。

「ありがとうございます」強い意志を感じ取れる少年の口調。

車内へもぐりこんだ少年へ「体を運転席の後ろへ、そして運転席と助手席座の間に頭から割り込む、おばあさんの体を避けながらシート前方下のレバーを引く」手順を伝える。

「レバー引きました」少年が叫ぶ、すぐさま窓から手を入れ助手席シートを後ろに下げる。

「おばあさんの体を越えて座席左側のレバーを引いてシートを倒す」少年がゆっくりとシートを倒すと老婦人の体はほぼ解放された。

わたしと別の少年が老婦人の脇をかため車から引き抜き始める。

車内の少年が持ち上げるようにして押し出す。

負傷し、衰弱はしているが老婦人に生命の危険は感じられない。

気高い少年達に後を託し再びYAMAHAを始動する。

「大変、土岐君、アンタマが大変！大変なことに、早く」アンタマの友人の叫び、携帯が震えるくらいの声が飛び出してくる。

「すぐ来て」の催促にとりあえず家を出る。

公園が見えた、「こっちよ！早く早く！」女子高生達の声が飛んでくる。樹木の高い位置に何かが動いている。

木の下のへ行って見上げるとアンタマ、そして小学生くらいの男の子。

「アンタマどうした」と声をかけると、「来たか、タケ！この子を木から降ろすのを手伝ってくれ！」とすばやい返答。

どういう経緯かは不明だが、二人が木から降りれない状況にあることは認識できた。

「今行くからもう動くなよアンタマ、それとパンツみえてるぞ」

そう言いながら強度を確認しながら枝を掴み瘤に足をかけ昇り始める。

児童公園にしてはかなり高さのある樹木、するり昇り上がり状況確認。

猫が一匹と三、四年生くらいの男の子、そして女子高校生各一名。

木から降りれない猫を助けようとした男の子、さらに降りれなくなった男の子を助けようと女子高校生、そんな連鎖かな。

「ぼく、猫ちゃんをもらうよ」猫を掴んで首もとからTシャツの中へ、そしてスノボの滑走のように木から滑りおり、アンタマの友人へ猫を渡す、ふたたび木にかけのぼって男の子の救出。

向き合わせで男の子を抱きつかせ、枝を選びながら慎重に降りる。

最後はアンタマ、「二人の体重を考えると、抱っこやおんぶはだめだな、アンタマ」笑いながら言う。「タケを足場にしながら降りる」きりっとアンタマの作戦。

「それもありかな、パンツずっと眺めてられるし」苦笑しながらぼく。

「許す、タケには権利があるからな、姫を守る騎士だから許す。」

なんだか愉快的な気分が無事全員と猫一匹を救出。

昇れたのだから当然かもしれないが肩を足場に貸すとアンタマはひょいひょいと降りて来た。

「お兄ちゃんお姉ちゃんありがとう」、猫を抱いた少年が降りて来たアンタマに駆け寄る、「猫ちゃんの救出に協力できてこちらこそありがとう」アンタマが笑顔で応える。

「今日は空中で救助隊、この間はチンピラに絡まれるお年寄りの救援、その前もいろいろ、当然次回もあるんだろうなあアンタマ？」と苦笑するぼくに、「そのときはそのとき、いつでも出動できるようにスタンバイしてるのだぞ、最愛の騎士」とアンタマ。

海辺にでた、海上にも結界は構築され外からの侵入を拒んでいる。
地下道、地下鉄、頭に浮かんだそれを探しはじめる。
標識を確認しながら地下鉄の駅を探す、いくつかの通り、交差点を走ると地下鉄駅の入り口を見つけた。
地上へ出てくる人の姿があるが地下鉄は生きているのか？。
スピードを落として地下鉄駅の入り口に侵入する。
低速で階段を降りて行く、非常灯が頼りない明るさで構内を映し出す。
前輪を持ち上げ改札を抜け再び階段を下り、プラットホームへ降りる。
地下鉄もやはり稼動していない、停車している地下鉄の車両の先端から線路へ飛び降り坑道の線路脇を徐々に速度を上げながら進む。
時折、結界の内側から逃げてくる人々とすれ違いながら、数分で地下鉄坑道を走り抜け隣駅のプラットホーム。
構内の状況を確認して一度Uターンする。
助走に必要な距離まで坑道に戻り、再び向きを変えレールの上にタイヤを乗せ、静かに助走をはじめる。
プラットホームの直前で前輪をロックして後輪を持ち上げる、後輪が浮き上がりはじめるとすぐに前輪を解放し人類が創造した慣性法則に逆らいながら車体を浮かせ方向を変えプラットホームへ上がる。
出口を探す、非常灯を追い地上への階段へ向かう。
静まり返った暗い通路、YAMAHAの鼓動が構内を震わせる。
地上へ向かう狭い階段、重心を後方へ移動させ前輪を浮かせながら一気に昇り上がる。

威圧、大気に充満する邪気。

階段を昇りきると異質の結界の中、日常は消え魔界という稚拙な表現がふさわしい澱んだ空間。

YAMAHAを停止し、周囲を確認する。

船が見える、港なのか？結界と海に阻まれ陸走で都心に入るのは不可能かもしれない。

都心部と思われる方向に目をやるといくつもの黒煙が立ちのぼっている。異質の結界は建築構造物にダメージを与えるのだろうか、半壊しているビル、倒れた信号機、遠くに見える倒壊した橋。

岸壁に人が集まっているのが見えた、速度を落としそちらへ向かう。

数十人、憔悴しきった表情、怯えた目で座り込む人々。

エンジン音が聞こえた、それほど大きくない箱型の船がこちらへ向かって来る。

グレーを基調とした迷彩色のそれは水しぶきをあげながら疾走して来る。

船着き場の手前までくると急速に速度を落とし、前方の揚陸用ハッチが開きはじめる。

着岸すると人々が飛び出すように船から急ぎ下船する。

上陸強襲艇？、かなり旧式のようにだが自衛隊の装備のように思える。

下船した人々は一般市民、一様に恐怖が顔を染めている。

若い自衛隊員が婦人を背負って降りて来る。

呆然と集まっている人々の所へ婦人を降ろし足早に戻って行く、船には他の隊員の姿は見えない。

彼を追いかけ、「救助活動中なのですか？他の隊員は？」と聞く。

「異変から避難してくる人たちを救助しています。他の隊員は陸上救助活動中消息を絶ち一人となりました」

「一人・・・撤退するのですか？」

「救助を待ってる人々がいますので戻ります」

「あなた一人で？」

「困難ではありますが、自分にはまだ任務を継続できる十分な勇気が残っています、助けを呼ぶ声が聞こえます、行かなければ」若い自衛隊員の笑顔が見えた気がする。

この船であればYAMAHAを運べる、「わたしを運んでもらえますか？」隊員へ問う。

「民間の方はここから非難してください、避難勧告が発令されています」危険、それを訴える表情で隊員は答え、背を向け船へ歩き始める。

眼を綴じ精神を集中、隊員の心へ思念波を送る、前世の災いの情景、そしてわたし災いの中へいかなければならないことを。

立ち止まる隊員、振り返りわたしをじっと見る。

「わかりました、行きましょう、さあ急いで」

要救助者を探しながら船は進む。

岸壁に数人の集団を発見した自衛隊員は舵を切り船の方向を変える。
揚上ハッチを開きながら着岸。

追われる小動物のように急ぎ人々が船へ乗り込んでくる、その脇を
YAMAHAを押し出す。

違和感に足を止め、振り返る。

集団の中に赤ん坊をかかえた母親がいた、違和感はその母子。

違和感の正体を探ろうとYAMAHAを陸上にあげ、船へ引き返す。

赤ん坊は"もどき"へ移行しはじめていた、皮膚が青みを帯び、腫が澱ん
でいる。

なぜ？欲望を暴走させた権力者のみが許されるもどきへの進化では
なかったのか？、

無垢な心の赤ん坊がなぜ？

"もどき" . . .

封印を解き混沌を招き入れその創成の力により不死者となった者。

姿は人に似せた流動物体、人を襲い欲望を吸収し続ければ完全体に
移行する。

貪欲の帰結、時空を越え存在し続ける心を持たぬ不定形物体ノスフェラトウ。

欲望を膨張させ続け、権力という虚空の虜になりさがりった者だけが許される
生物の究極の進化。

"もどき"へ移行する赤ん坊、異質の結界、無差別の破壊、
"存在を疎ましく思うもの"が侵食をはじめたのか。

銀の十字架を胸からはずし念を込めながら右手の掌で握り締める。
母親に鎮めの思念波を送りながら赤ん坊に十字架を乗せる。
異質の結界をであれば赤ん坊は邪気から解放され、無垢な存在へ帰る
ことができるだろう。

自衛隊員に別れを告げ、YAMAHAを再び起動する。

鉄屑と瓦礫へと変貌した都市そこに珠代がいる。

破滅を選択し、滅亡への流れを導いた権力者達の巣窟を探し、YAMAHAは
都心部へ向けて走り出す。

珠代を救い出す、珠代ではない存在へ変貌していようと。

チャクラを開き異質の波動の発信源を探る。

微弱だがとらえた、発信源の方向に視界を向け文言を唱え瞼を綴じると、薄ぼんやりと揺れるオーラに包まれた高層ビルを感じた、そこか。

乱雑に放置された車などが道を塞ぐが、YAMAHAのタフな心臓と俊敏な足回りは障害をかわし、乗り越え走り抜ける。

天空の巨人という表現にふさわしい鉄塔を過ぎるとその高層ビルが見えてきた。

大きな交差点に差しかかりると右手方向に”もどき”が多数、その向こうにロケットデコレのバス・・・

人がいる。

速度を落としながら重心を右へ、フロントブレーキ、前輪ロックと同時に浮き上がる後輪をサイドへ強引にふり着地と同時に後輪をスリップさせながら加速、急速にバスとの距離を短縮する。

追い詰められた保育園バス、その回りを老人たちが取り囲んでいる。

ゆらりぬらり”もどき”が獲物を求めてバスへの行進。

恐怖におびえる園児たちの顔が窓に張り付いている。

老人たちは押し戻そうと必死の形相でもどきに挑む。

命を燃やし尽きた老人が一人、また一人倒れていく。

行く手の”もどき”をかわしながら老人達と”もどき”の間に割り込む。

両拳を振るい”もどき”を振り払いながらYAMAHAのサイドを左足で蹴り出す、蹴り出した左足を軸にしてさらに跳躍しながらの半旋風脚で”もどき”蹴り飛ばす、着地と同時に連続で擺脚を繰り出しもどきを押し戻す。

ブーツに仕込んだ十字架形のナイフを両手で左右に飛ばし印を結び手刀を切る。

詠唱によりナイフを基点に結界が発動しバスの周囲を包み込み”もどき”を遠ざける。

「ありがとう、ありがとう、子供たちを助けてくれて」老人が達が集まってきた。

「あなたたちこそ」一礼をしながらそう老人達に返してバスに乗り込む、が・・・

その保育園すべての園児たちが乗り込んでいるのでは、と思うくらい園児たちで車内は埋まっている。

車外へでて運転席の窓へ近寄るとすすり泣く運転手、いや保育士か？

「大丈夫ですか？」声をかけると、泣き顔がこちらを向く。

「バスが動かなくなって、怪物が押し寄せて・・・」、動揺そして混乱が彼女を支配している。

「エンジンを見ます」彼女にそう告げてYAMAHAのツールボックスから工具を取り出してバスの後方へ向かう。

後部のエンジンカバーをはずして内部を探る。

この形式であればいけるかもしれない・・・

「電子制御との接続をカットしてダイレクトにプラグ点火させるようにします、いったん全員外へ」、運転席の保育士へ支持をだし、老人達、車内の園児達へ伝える。

園児達全員が降りると、エンジンルーム、運転席、フロアの床下の配線コネクターを変更する。

短時間に作業を終了させバスの始動を試みる。

強引な配線組み換えのため、キースタートではなくエンジンルームの配線直結でセルを回す・・・

ドンッ！詰まったものを吐き出すようにバスのエンジンが始動した。

バスへ園児たちを乗車させながら、老人達も押し込もうとするが・・・

「バスはもう乗れない、子供たちで定員をはるかに越えておる」、

「わしらはいい、子供達を早く非難させるのじゃ」

「そうじゃ、わしらはここで旅立った友の面倒も見なくてはいけないからのお」口々に訴える老人達。

十字架ナイフの結界が揺らぎ始めている、急がなければ。

重く低いディーゼル音が響きわたる。

一台の壊れそうなダンプトラックがこちらへ向かってくる。

みるみる近づくそれは、”もどき”などにひるまず結界の中へ突っ込んできた。

ねじり鉢巻きの若い男が窓から身を乗り出しながら「乗って乗って、早く早く！」と叫ぶ、助手席のドアが開き、「非難しましょう、急いで！」警官が降りてきて叫ぶ。

荷台に乗っていた男たちが老人たちを助けに降りてくる。

「どなたかバスの運転を変わってあげてください」わたしは彼らへ叫ぶ、「おまわりさん、ダンプを頼む、おれはバスを運転する」すぐさまねじり鉢巻きの男がわたしに伝えて運転席から飛び出して来る。

彼に聞く、「避難場所は？」

「探す、いままで大丈夫だった陸自の基地は橋が駄目になっちまってもうだめだ」

「わたしを運んでくれた自衛隊の船が沿岸付近で救出活動をしています」
「了解、にいちゃん」覇気であふれる彼に救助をしている自衛隊の事を伝える。

新たな避難場所を得たねじり鉢巻の彼は、保育園バスの運転席窓へ向かい窓から体をねじ込み、保育士を隣へ移動させ運転を代わる。

ダンプトラックが先頭を走り始める、追うように保育園のバスが動き始める。

バスがローギアで動き始めると同時に十字架ナイフの結界が消滅した。結界の回りを徘徊していた”もどき”もどきがこちらを伺う。

YAMAHAのフューエルがそろそろエンプティ・・・

アクセルをふかしギアをガクンを入れる。

にじり寄るもどきをアクセルターンで一蹴しYAMAHAは再び駆け出す。

その場所へ近づくとつれ、揺らり蠢く影がその数が増す。
発動にされたその恩恵を受け”もどき”へ進化できるのは、一握りの
権力者とその取り巻き・・・数人のはずだが・・・
未知のウィルスに感染するかのように”もどき”が増殖している・・・
何かが変わる。

高層ビルの真下にたどり着いた。
高層ビル、いやイベントハウスというべき着飾った建築構造物だった。
心臓が血液を送り出すように眼前のイベントハウスは鼓動を打ちながら
異質な波動を空間へ送り出している。
大気へ流れ出す邪気も道化た魔物のそれとは違う。

YAMAHAを降りメインスタンドを右足で踏みながら立てる。
少し前にフュールは空っぽになったがここまでわたしを連れてきてくれた
YAMAHA。

「ありがとう友よ」礼を捧げ、キーを回し切断する。エンジンが沈黙。
「さようなら、友」別れを告げると音叉の紋章の光がそこを離れ、左右の
それが一つとなりコウモリのようにヒラリヒラリと宙を舞いそして空へ帰っ
ていく、「ありがとう、そしてさようなら」もう一度礼を捧げ、異様なデコレー
トの入り口へ歩き出す。

所々破損している入り口から中へ入る。

入り口にはイベントを案内する表示があった。

そこにあったイベントは一つだけ、”平和で美しい世界、約束の時を今こそ現実へ”と詠っている、どこかで耳にしたフレーズ・・・、メイン会場は最上階。

照明が消え暗いフロアー、エレベータは停止しているだろうから、ロビーを見渡し非常灯を探す。

非常口への誘導を確認し周囲を伺いながら進む。

異様な臭気が満ち溢れているフロアー。

簡素なパーテーションで仕切られた片隅の来客コーナーから、くちゃくちゃと悪寒を誘う咀嚼音が聞こえる。

近づくと、原型は小形犬と思える”もどき”が飼い主だったであろう骸を食らっていた。

”もどき”には飯を食らう欲望は発生しないはずだが・・・”理”にすら異質な波動は影響し変化させている。

わたしに気づく気配すらない食事の犬の”もどき”にかまうことなく、奥へ進む。

少し進むと非常口があった、スチールの扉を開けると広めの踊り場と階段があった。

扉を静かに戻し階段を昇り始める。

邪気、それが異質の波動の鼓動に乗ってあふれ出している。
最上階、彫刻で飾られた大きな中央入り口、木製のドアがかすかに揺れている。

近づくと招き入れるように扉が左右に開く。
劇場のようなホールが現れる。
広い中央通路に踏み出すと後ろで扉が閉じるのを感じた。

左右設けられた階段状の観客席には多数の蠢く影。前方にも影が揺れている。

BGMのように周期的強弱のあるざわめき、いや念仏？が空気を振動させている。

影、"もどき"をやり過ごして前へ進もうとするが道をふさぎ絡んできたので手刀で打ち抜き硬直させる。

1体を処分して見せると、他の"もどき"はわたしの存在を無視することに決めたように通路から消えた。

観客席の最前列付近まで進むとホール全体を把握できた。
正面の大舞台、それと観客席の間に円形の広間、そこに設けられた祭壇。

中央広間の床には魔法陣、祭壇は配線と油圧装置で構成され生贄を拘束する十字架が置かれている。

階段状の客席は祭壇を取り巻くようにC形に配列され、舞台には巨大なスクリーン、巨大なスクリーンは客席側の壁にも数箇所にも取り付けてあった。

舞台の巨大スクリーンの前に置かれているオブジェ・・・豪華の限りを尽くしたつもりであろう王座。

そこに座し、破壊的な邪気を放つのは妖狐を纏う女神・・・
「玉藻」わたしの唇がその名を綴る。

玉藻の唇が動く、同時に妖狐の口が大きく開き禍々しい赤い火球を放つ、空間を押しつけて飛んでくるそれを刀を抜きそのまま上段から振り落とし粉碎する。

違う。

民を苦しめる権力者を無効化し、民たちに希望と夢を与える、それが玉藻の発動。

玉藻は正し、導くもので破壊者ではないはず・・・異質な波動が玉藻を支配下においている。

玉藻の悲鳴のような嘲笑が鼓膜を襲う。

九本の尾が渦潮のように打ち込まれてくる、振りほどくように刀で流し、体をひねり尾を踏み台に中へ飛ぶ、

狐の眼が閃光を放つ。肉が焼ける匂い、左腕に焼けた貫通孔。

九尾の狐・・・母狐と8匹の子狐の悲しい物語り。

狩場に迷い込んだ狐の母子達、心ない狩人達に見つかり死の谷へ
追い込まれる。

硫黄の臭気、嘆き苦しみながら九つの命は途絶える。

それを知った玉藻は母子の魂を絶望の枷から救う。

母子の魂は九尾の狐へと昇華し女神を守り続ける、玉藻が邪神として
発動した今も。

印を結び文言を唱え結界を得る。

さらに文言を唱え跳躍、狐の攻撃をかいくぐりながらコートに仕込んだ独鈷杵を連続で飛ばす。

防御に戸惑う狐の正面へ移動しながら、玉藻へ掌から念波動を打ち込み、狐の顔面を一文字に切り裂き眼を潰す。

刀の勢いそのままに上段へ回転させ狐の頭部へ打ち下ろす、しかし狐を粉碎する直前、玉藻が放った衝撃波がわたしを天井へ叩きつける。

落下して行くわたしに狐の尾が連続で打撃をしかけてくる。

打撃をかわし足場にしながら体をひねり床へ着地、足を蹴り後方への空中回転を繰り返す。

玉藻との間合いがとれたところで体勢を立て直し剣を抜く。

卍のイメージを空間に固定し、刀と剣を十字に重ね宙へ放つ、猛禽のように宙を舞いながらそれは狐の尾を切り刻んで行く。

間をおかず玉藻へ向けて三鈷杵を左右同時に放ち、追わせるように空間を圧迫して次元波を打ち込む。

戻って来た刀剣を背中へ戻し、封印の印を結び文言を詠唱する。

三鈷杵で玉座に縫い付けられた玉藻を、文言により発現した重力波が押し固める。

玉藻の頭上に封印の五桁星が印され、闇の環が玉藻の力を無効化しながらその内部へ収縮させていく。

封印に抵抗する玉藻。

苦しみの表情で何かを訴えようとしている玉藻。

・・・思念波が送られて来た。

「忌むべきは人、大地むさぼり、未来を冒瀆する・・・人は滅びるべきではないのか？、サムライよ」

玉藻の問いにわたしは答える。

「滅びは存在の否定、創造主の一部であるあなたの望むのは存在の否定ではないはず」

玉藻は続ける。

「現代という時を暴欲により支配する人はやがて自滅する、しかし人の暴走が生み出すは災いはそれだけにとどまらず、空間という時の記憶を繋ぐ力を弱め、やがて失わせる」

「未来へ繋ぐ力を失った空間、宇宙は”存在を疎ましく思うもの”虚無に飲み込まれ消滅するのだ、サムライ！」

「いく度にも繰り返した導きを無にし、人は欲望に沈む道を選んだ」

玉藻の悲痛が伝わってくる。

「玉藻よあなたは・・・玉藻よ、それでも未来への希望を導くのがあなたの見守り、そしてあなた自身の存在の根源」

「珠代は死んだぞ！」激しい口調、叫ぶ玉藻の眼は虚ろだ。

念動波が場を支配する。玉藻がここで起こった空間の悍ましい記憶をリピートし始める。

司会者の紹介、満面の笑みを浮かべ華やかに登場する珠代。

しなやかな歩みでピアノへ向う珠代、珠代が座るとホールの照明が静かに、そして色を変えながら減衰されて行く。

単調なメロディーと和音が静寂なホールに解き放たれる、柔らかなスポットライトが珠代を空間に刻む。

高校のときによく聞かされた珠代の自作アンソロジーがホールを草原へ、そして星空へ誘う。

演奏が進んでいく、観客たちの興奮が見える、中には血走った目をしている者すらいる。

躍動と平穏が調和する珠代の感性を十分に表現できているアンソロジー。

ホールのいたるところに設置された巨大スクリーン・・・

ネットワークで接続した複数の場所とリアルタイムで結ばれているのか？

そこに映し出される映像はこのホール同様・・・イベントホールの中継？

ネットワークを通し、多種の人種が珠代の演奏を聴いているのが映し出される表情でわかる。

演奏の終盤を迎えるとホールの興奮は絶頂を極める？・・・ピアノの演奏・・・

紳士淑女の集まりのはずだが・・・

立ち上がって歓喜を挙げている者が多数いる・・・

首相、スクリーンには大統領？見覚えのある金バッチ。

「タケ、ちゃんと聴いてたかっ？」演奏が終わるときりっとした顔をぼくに近づけながらアンタマ。

「今瞼が開いてるってえことは、ぼくは寝ないでアンタマの演奏に聴きほれてたということの証明にならないかな？」

微笑ながらアンタマへ応える。

メカマニアで芸術には疎いぼくだけど、アンタマが時折聴かせてくれるアンソロジーは時を忘れさせてくれる。

ぼくの奥底というのか、思考の底といのか・・・そう、魂と共鳴すると表現したらよいのかな。

「もうすぐだね」今の天井へ視線を上げながらぼく。

「出雲と東京、赤い糸で繋がっているわたしとタケルには無いに等しい距離でしょう」

いつになくマジ見つめなアンタマ・・・言葉遣いもなんだか違う・・・

「あなたのためのアンソロジーも完成したし、まとめるのに苦労したの、わかる？タケル」

「ぼくの心がそれに共鳴しているのがわかるよ、アンタマ」

時よ・・・止まれ。

演奏を終了すると歓喜の拍手に包まれながら珠代は中央へ案内される。
マイクに向かい謝辞を述べる珠代・・・背後で何か蠢く。

珠代が観客へ向け手を振ろうとした時、背後に十字架が立ち上がった。
微笑マスクを捨て司会者とアシスタントが素早く珠代を十字架の枷に固定
する。

無表情な司会者とアシスタント、そして背後で蠢いていた黒子達が段取り
よく生贄の祭壇を仕上げていく。

恐怖に固まる珠代・・・観客達の歓喜はさらに燃え上がる、壁のスクリーン
の向こうでも・・・

注射針が思考を奪う薬を珠代へ注入する。

珠代に取り付けられたセンサーが読み取る生態波動を電気信号へ変換し、
コンピュータがそれを解析、結果をパケットでワークステーションにリアル
タイムで送る。

マルチモニターへ切り替わったスクリーンにインタープリタされた珠代の
生体データがサブ画面表示される。

サブ画面のグラフが変化する度に観客達は歓喜に揺れ動く

スクリーンにreadinessがUPされる・・・

いつセットしたのか・・・舞台には灰色の衣の集団が整列していた。

そのなかの長らしきどっぴりと超え太った灰色衣が祭壇へ、十字架の前へ
進むとスクリプトを低音の声で詠い始める。

スクリーンにテロップが流れ始めるた・・・”平和で美しい世界、約束の時を
今こそ現実へ”、そして”絶対的正義こそ未来を導く！”・・・”古き封印を解き

放ち永遠の命を我らの手に”・・・油圧の機械装置が起動する、アームの

アタッチメントに取り付けられたドリルやチェーン・ソーが珠代の体を切り刻み
はじめる。

醜悪な儀式・・・珠代の体、そして薬で混濁させられた思考の奥の心が破壊されて行く。

解析データ項目の一つがピークをアラームと赤い点滅で知らせる。

その点滅に追い立てられるように灰色衣達はその衣を脱ぎ捨てる・・・消えた？・・・

脱ぎ捨てられた衣だけが床に散乱している、それを着ていたはずの人の姿はない・・・マジックショー？

緊張、テンションが暴発しそうなホールで突然の余興？観客は意表を突かれ一瞬静まるが、すぐに余興と判断し、いっそう盛り上がる。

歓喜は天井付近の空間に亀裂を呼ぶ！さらなる絶頂へ向け観客の狂宴が加速する。

珠代の胸へ銀のピイルがゆっくりと沈んでいく・・・追い詰めながら虚実を引き出す魔女裁判の拷問手法？

心ある者であればその残忍さに吐き気をもよおすだろう。

ピイルの圧迫が珠代の肋骨を砕いた・・・見守る観客・・・

ピイルの先端部から滲み出る紫のオーブ・・・オーブはピイルの侵入を阻止しながら珠代の体を包んで行く。

傷ついた珠代の体を守るように覆うとオーブは、実体化を始める。

外郭が形作られその内部が光に満たされる・・・

・徐々に外郭の色素が固着していく・・・

祈りではなく、残虐な儀式で封印は破壊され混沌が開放された。

それでも力は輝く光として発動し、珠代を守護しながら降臨する・・・

まばゆい後光を背負いながら女神の降臨が完了しようとしたとき、祭壇が電磁波で打ち震える。

電気パルスの衝撃波に実体化を終えようとしたオーブが揺らぐ。

その時を狙い澄ましていたかのように、天井付近の空間の亀裂から灰色の稲妻が大気を伝い女神を直撃する。

一瞬の出来事だった・・・灰色の稲妻を捉えた者がいたであろうか。

後光が消え、オーブの内に輝いていた光は灰色の霧に変化する。

舞台のスクリーンにコンプリートの文字が眩く点滅しながら浮かび上がる、盛大な歓喜がホールの空気沸騰させる。

このホールだけではない、複数のスクリーンにネットワークの狂喜乱舞が映し出されている。

念動波は玉藻が邪神として発動する過程をリピートし終わると消えた・・・

超常現象に精通した秘密結社と結託した欲望まみれの権力者達が、珠枝という封印を探し出し、古き儀式と最新のテクノロジーを組み合わせその力を引き出した。

珠代の奥底に秘められていた転生の玉藻は発動し降臨した・・・
光の女神としてではなく、異質の邪神として。

珠代の破壊、消滅という非道な儀式は異質の波動を呼び寄せた、

いやもしかしたら異界の波動の謀略がそうさせたのかもしれない。

異界の波動・・・その根源は虚無、"存在を疎ましく思うもの"が玉藻を邪神として発動させその力を利用し、この宇宙を飲み込み消滅させようとしている。

玉藻を異界の波動から解放しなければ宇宙、存在のすべてが虚無の海に沈み消滅する。

「空が泣いている、大地が怒りに震えている。感じているのだろうサムライ」玉藻が思念波を送ってくる。

「おのれが欲望を満たすために民を苦しめる豪族が不死とさらなる富を手になれようと玉藻の力を発動させ、
逆にわれの導きにより身を滅ぼし前世のそれとは違うのだ」

「すべての人間が欲望を満たすためだけに地上を這いずりまわる、命を玩具のように扱い、心すら弄ぶ・・・野望と虚実が人を支配する・・・」

「異質の波動が空間を取り込み、”理”を崩壊させつつある。それは虚無が企みを具現化させているからではないのだろうか、玉藻？」

「邪神として発動したあなたもその企みの一部となっている、虚無の束縛からその力を解放しあるべき道を示すのだ玉藻。」

「虚無の中に漂う混沌、そこに光が生まれ、それを闇が包み守る」

「虚無の海に沈まず存続できた光はやがて集まり宇宙を創造し、命を結実させる」

「虚無という海を希望という力で未来へ向けておよぐ魚、それが命、あなたは宇宙を創造し、生命を育んだ光の一つ」

「肉体という脆弱な媒体にしかその存在をと留どめることができない幼い人類、個としての存続に翻弄され彼らは命の尊さを忘れてしまったかもしれない」

「細胞の枯渇に脅え、欲望との対話でいまを生きる人類に希望は見えない、だが人類は失ったわけではないのだ、玉藻」

「車に閉じ込められた老夫婦を救い出そうと友人たちと力を合わせている少年達、たった一人で救助活動を続ける自衛隊員がいた」

「窮地に迷う人達を探しダンプで街中を駆け回りの建設作業員、警察官」

「幼い子供たちを守り命を燃やし尽くした老人達を見た、絶望的な危機に陥った時、人はその可能性を発動する、今はまだ幼い人類、しかしその可能性は夢を繋ぐ資格があるのではないか、玉藻」

「遠い時を人として幾度と転生し、肉体を通じて心を感じてきた、あなたもわたしも」

「前世では玉藻として権力者の暴走を挫き民の苦境を救った。その前もあなたは、何度も苦しむ民を救い、導きを行った」。

「発動を封じ、自らを収めよ玉藻」

「珠代はあなた自信、彼女を呼び起しおのれを取り戻すのだ玉藻」

「タケル・・・」珠代の声が聞こえた気がする。

玉藻の眼に力が見えた、虚無の束縛に贖うように玉藻の身体が震える。

玉藻の光が異質の波動の枷から自らを解き放そうとし始めたその時、天井の空間の亀裂が衝撃波を打ち出す、頭上の空間が歪みそれを押し破るようにスピアのような触手が玉藻を襲う。

九尾が前へ飛び出しを玉藻を庇う、九本の尾が木の根のように分岐を繰り返しながら迫る触手を渦巻のように回転しながら連打で打ち返す。

九尾はさらに空間のほころびへ口から火球を打ち込み、眼から赤い閃光を飛ばす。

ドンッ！、突然大地がゆれホールを凄まじい灰色の旋風が巻く、その風圧で浮力を得た”もどき”達が空中を舞ながら襲い来る。

刀と剣を下段に構えながら跳躍、向かって来る”もどき”を刃を縦横無尽に振り打ち落とすが、数が多すぎる。

着地し刀を収め両手で剣を握り前方に突き出し、剣に宿る”形ならざるもの”へ祈る。

「わが祈りに応え心失いし悪しき骸の軍勢を滅したまえ！草薙の剣！」
剣が青い火炎を吹き上げるとともに爆風を発生させる、青い火炎が”もどき”を薙ぎ払いながら円環状に広がって行く。

青い火炎に触れた”もどき”はその内に業火を発生させ塵と化す。

「九尾いー！」玉藻の悲痛な叫びが響き渡る。

見上げると”もどき”にまわりつかれ動きを封じられた九尾が触手に体を突き抜かれ空中に捕らわれていた。

・・・まずい、消去される。

触手が貫通している九尾の体の一部が色を失い始めている。

膝を曲げ剣の力を借り跳躍、両手で握りしめた剣を突き出し九尾を捕らえる触手を打ち抜き粉碎しながら空中を突き抜ける。

天井を蹴り反転、左手で手刀を創り眉間に添え念を込め崩れ落ちていく九尾に手刀を振り守護の結界で覆う。

態勢を立て直しながら着地、浸食してくるそれを押し戻すために剣を戻し印を結ぶ、侵入者を封じる文言を詠唱し手刀を切ろうとした時、それが語りかけてきた。

「闇の者よこの宇宙の滅びの時が来た、ただそれだけのこと・・・運命というべきか・・・」

「進化に行き詰まり自ら完結を求めた存在を守る義務が闇にあるのか？
闇の者よ」

「無限の彼方へ夢を馳せることもなく、地面をはいずり回り餌を奪い合い、共食いすら厭わない人間、自らを淘汰するのもしかたいこと」

「この宇宙の終結は見る価値すらないだろう、贖うことやめ混沌へ還るのだ闇の者よ」

”存在を疎ましく思うもの”虚無は真実を告げているのかもしれない、
だが・・・

「個として進化を続けてきた人間は確かに今を頂点と思いを違えているかもしれないが、肉体の進化と同時に心を育てて来た人間は個から脱却し新たなる光を生み出す可能性を秘めている、今はまだ進化の過程なのだ」

「虚無という無限の大海に浮かぶ塵、存在には存続する意味も理由もないかもしれない、だが存在、命は奇跡」

「わたしは守り続ける、虚無よ去れ」

「指導者の座に胡座をかいてる者達とその家族がここに数多くいたのを知っているか？人間の代表として運命を左右する者達が、我が身の永遠の存続のみのために集い終焉の宴を開いた、彼らが引き寄せたのだ虚無を」

「滅亡の願いが達成されるよう手助けもした、創造主のを邪神へと変えるよう手引きもした、創造主がを汚すことで空間が虚無の海と繋がった」

「最後に創造主を消去すればすべては虚無の海へ還る」

「わたしは闇の防人、守るためにこの地に存在を許された」

わたしはそう言い放ち、文言の詠唱を再開する、手刀を切りすぐさま印を解き両掌を頭上の空間の綻びへ向ける。

この宇宙を覆う闇が力を貸してくれる、わたしの体を発現の基点として力が集まり掌から打ち出される闇の波動が虚無を押し返し始める。

空間の綻びの侵食が止まった。

質量を感じない新たな衝撃波が頭上から打ち付けられ一瞬動きを封じられる。

次の瞬間背後からなにかが胸を貫通し前方の壁に打ち刺さる。

漆黒に輝き、螺旋の文様の羽のない矢・・・魔破矢。

わたしの体にあいた穴から黒い血がしぶきを上げながら流失していく。

振り返ると虚ろな表情の玉藻、その手に弓。

黒い血とともにわたしの体から闇の力が抜け出ていく。

虚無を押し返していた力が消えた、頭上できた空間の綻びが再び広がって行く。

虚無が海のように波打ちながらホール内部に流れ込みはじめる。

舌のように波打つ虚無の一端が”もどき”舐めとっていき、永遠の存在を求めた者達が無限の虚無の海へ回帰していく。

頭上の空間を食らうように風穴は広がって行く。

返り血を浴び立ちすくむ玉藻をめがけてて触手が走る、わたしの身体を玉藻の前へ投げ出す。

触手はわたしの身体をわけなく貫きそのままわたしの身体を玉藻に縫い付ける。

触手が身体を侵食し始める、刀を抜き放ち打ち砕くと触手は消えた、致命的な打撃を与えて満足したのか、触手はもう襲ってこなくなった。空間の侵食が加速していく。

珠代の体が横たわっていた、触手の一撃が玉藻の物質化したオーブを解体し力を奪った、そして玉藻は灯火の消えつつある珠代の中へ戻った。虚無に蝕まれつつある体は復活の文言でも再生は不可能、珠代が虚無の海に消える、悲しみがわたしの思考を停止させる。

珠代の身体に被さるように身体を重ね消滅の時を待つ。

世界が消去される、宇宙が消える・・・すべてが虚無の海に消える。

止まれ、まだ道がある。

「アンタマ聞こえるかい、ぼくだよ」、「アンタマ！」耳元へ顔を寄せて珠代を呼ぶ。

眼にぼんやり光が見えた。

「タケ・・・タケ・・・」か細い声が返ってきた。

「聞くんだアンタマ」

「ぼくは最愛の人か？」

うなづく珠代。

「よし、そしたらいっぱいいろいろなことを思い出しながら、ずっと一緒にいますようにと祈るんだ、そして未来を造るんだ、いいねアンタマ」

うなづく珠代。

ぼくは座を組み合掌、そして文言を詠唱し、チャクラを解放していく。

七つ目のチャクラが解放されるとぼくの肉体はゆらり揺らぎ始める。

ぼくの体が、原子、電子この宇宙の物理原則から解き放たれ素要素である光となると、まとわりついていた虚無が剥がれ落ちそして消えて行く。

ぼくは素体となった体をアンタマに重ねる。

最後の詠唱をすると光の素体はアンタマの体に重なり始める。

破壊し尽された珠代の体だが、ぼくの素体との融合により細胞が活性化され、復活、再生をはじめめる。

融合が進むとぼくは肉体を離れ膨張する、闇そのものとなったぼくはこの宇宙のエーテルを受けながらさらにさらに膨張する。

アンタマを視る、そして飛翔。時すら越える加速。意識が拡散し存在が消えて行くのがわかる。

ぼくと虚無との衝突の衝撃が一瞬宇宙を震わせる。

解き放たれた闇は宇宙を覆い虚無を押し戻して行く・・・「いつかまた、アンタマ」

世界各国の主要な都市で発生した災いは去った。
表裏で世界を破滅へと導こうとした権力者達は自ら招き寄せた虚無の
海に清えた。

大切なものとは何か？人々は存在の意味ではなく、存在の理想を
求めるようになった。

命は奇跡、つながり拡がって行く記憶、そして宇宙。

遠くに神々の寄り所とされる社の一部が見える。

「タケル、タケル」母親が幼子を呼ぶ、老人の腕から降りたその子は
ぎごちない歩みだが小走りで、そして満面の笑みで母のところへ。

「アンタマかあたん」と母を呼びながらしがみつく。

「大好きだよ、タケル、タケ、タケ、アンタマはタケが大好きなのだ。」
優しく、込めたたくさんの想いで子を抱く母親。

雨の闇夜中朽ち果てるその時を待つ捨てられた人形のように、
大切な人を失った哀しみに耐える日々。

生きていることが裏切りにも思える時もあった。

ある夜、男が現れた。

漆黒の闇の中、姿のない男と一夜の情を交わした女は
小さな命を授かった。